



## 研究論文 (Articles)

# アレキシサイミアの特徴が ソーシャルサポートと対人疎外感に及ぼす影響

阿部 夏希・中島 健一郎

(広島文教大学・広島大学)

The effects of aspects of alexithymia on social support and interpersonal alienation<sup>1)</sup>

ABE Natsuki and NAKASHIMA Ken'ichiro

(Hiroshima Bunkyo University, Hiroshima University)

The purpose of this study is to clarify the interpersonal process focused on difficulty identifying one's own feelings and difficulty describing feelings by examining models focused on the fear of negative evaluation (FNE), other-oriented responses, and social skills. Previous studies have shown the relationship between aspects of alexithymia (difficulty identifying one's own feelings and difficulty describing feelings), social support, and interpersonal alienation, but it is as yet unclear what kind of process occurs. To solve this problem, we conducted a questionnaire survey of 142 ( $M_{age} = 20.043$ ,  $SD = 1.511$ ) Japanese university students and analyzed the data using structural equation modeling. The results indicated that the higher the difficulty identifying one's own feelings scores, the more FNE led to other-oriented responses and interpersonal alienation. In addition, the higher the difficulty describing feelings score, the more social skills led to social support and interpersonal alienation. Taken together, these results show that FNE and social skills have a significant influence on the interpersonal relations of aspects of alexithymia and suggest that approaches targeting their reduction may provide salient psychological interventions in this domain.

本研究の目的は、感情認識困難と感情言語化困難というアレキシサイミアの特徴がソーシャルサポートと対人疎外感に及ぼす影響について検討を行うことである。先行研究では、感情認識困難や感情言語化困難の傾向が高い人々はソーシャルサポートが得られにくく対人疎外感が高いことが示されているが、それがどのようなプロセスを経て生じるのか、十分に明らかにされているとは言えない。この点を明らかにするために、本研究では、評価懸念、他者志向的反応、対人スキルを媒介変数として、大学生142名(平均年齢 = 20.043,  $SD = 1.511$ )を対象に構造方程式モデリングによるパス解析を行った。その結果、感情認識困難が高いほど評価懸念が高く、他者志向的反応と対人疎外感の高さにつながっていることが示された。さらに、感情言語化困難が高いほど対人スキルが低く、ソーシャルサポートの低さと対人疎外感の高さにつながることが示された。この結果から、感情認識困難傾向や感情言語化困難傾向の高さによるソーシャルサポートと対人疎外感への影響を間接的に低減するためには、評価懸念の低減や対人スキルの向上が有用である可能性が示唆された。

**Key Words** : aspects of alexithymia, social support, interpersonal alienation

キーワード : アレキシサイミア, ソーシャルサポート, 対人疎外感

1) 本研究は2020年に第1筆者が広島大学大学院博士課程に提出した博士論文の一部を加筆修正したものである。

## I. 問題

アレキシサイミアとは、自分の感情や身体感覚に気づいたり、感情を表現したりすることが苦手で、想像力が低く表面的な事実に関心が向かいやすい性格傾向を指す (Sifneos, 1973)。この傾向は Bagby, Parker, & Taylor (1994) が開発した The twenty-item Toronto Alexithymia Scale (TAS-20) によって測定されることが多く (Kinnaird, Stewart, & Tchanturia, 2019)、日本でも妥当性が確認されている (小牧・前田・有村・中田・篠田・緒方・志村・川村・久保, 2003)。TAS-20 の下位尺度は感情識別困難 (difficulty identifying one's own feelings : DIF)、感情言語化困難 (difficulty describing feelings : DDF)、外的志向性 (externally oriented thinking : EOT) の3つから構成されており、感情識別困難は自分の感情を識別することの困難さ、感情言語化困難は感情を表現・記述することの困難さ、外的志向性は自らの感情を伴わない表面的内容を述べる傾向を表している。

元来、アレキシサイミアは心身症患者への臨床実践から概念化されたこともあり、その実証的研究は臨床群に対する調査を中心に展開してきた (Bagby et al., 1994 ; 盛田, 2010 ; 中島, 2013)。アレキシサイミア傾向のなかでも感情認識困難と感情言語化困難の高さは特に不適応にむすびつきやすい (e.g., Taylor, Parker, Bagby, & Acklin, 1992; Turk, Heimberg, Luterek, Mennin, & Fresco, 2005)。感情認識困難が高い場合、ストレス知覚のしやすさ (Hua, Le Scanff, Larue, José, Martin, Devillers, & Filaire, 2014) や、ストレスフルな状況を把握したり整理したりすることの苦手さ (遠藤・湯川, 2013) だけでなく、身体愁訴など心身の問題と関連しやすい (Taylor et al., 1992) ことが報告されている。感情言語化困難に関しては、他者からのネガティブな評価を不安に思う傾向の高さ (Turk et al., 2005) や、失敗や傷つきを極度に恐れる傾向 (Nicolò, Semerari, Lysaker, Dimaggio, Conti, D'Angerio, Procaccia, Popolo, & Carcionea, 2011) との関連が指摘されている。これら感情認識困難と感情言語化困難の特徴が高いことによる不適応は、対人関係のなかで生起

しやすい問題であり、なおかつ、健常群として生活している個人にも見られることから、介入の必要性について議論されている (Popkirov, Flasbeck, Schlegel, Juckel, & Brüne, 2018)。また、上述した先行研究では青年期にあたる大学生が対象となっているものも多い。これは、急激な心身発達を遂げる青年期において対人関係上の問題がアイデンティティの発達や心理的な安定性に大きな影響を与えるためである。たとえば、対人関係が良好であることは青年の精神的健康に好ましい影響を及ぼすことが複数の先行研究によって報告されている (e.g., Berndt & Keefe, 1995 ; 松井, 1990)。

以上から本研究では感情認識困難と感情言語化困難に着目し、これらの特徴が対人関係上の困難につながるプロセスについて検討する。対人関係上の困難さの指標としてはソーシャルサポートと対人疎外感を取り上げる。

ソーシャルサポートとは、個人をとりまく家族や友人からの有形・無形の援助である。Caplan (1974) は負荷がかかる状況において最も適切に対処できるのは、ソーシャルサポートが十分に得られた場合であると報告している。これは、ソーシャルサポートにストレス反応を緩和する心理的効果があり (Cobb, 1976)、主観的な満足感の獲得につながるためである (cf. Barrera, 1986)。特に、青年期においてソーシャルサポートを獲得することによって日常生活におけるストレスが緩和され (嶋, 1992)、精神的健康度に影響を及ぼす (箕口・千田・久田, 1989 ; 田中・長谷川, 2019) ことが明らかになっている。

対人疎外感とは「集団生活や社会生活の中で、自分が他者 (他人, 社会生活に正規する事象, 自分の周辺に起こる事柄, さらに自分自身) から排除されている, あるいは距離感・違和感を持ちどうしてもしじめない, 溶け込めない」という感覚である (宮下・小林, 1981)。対人疎外感は青年期における自我の発達 (宮下・小林, 1981) や適応感 (宮下, 1995)、そして情緒的成熟との関連 (Dean & Lewis, 1978) が指摘されていることから、青年期の様相を理解するうえで重要な要素であると考えられる。

先行研究では、自らの感情を認識したり言語化したりするのが難しい場合、ソーシャルサポートが乏





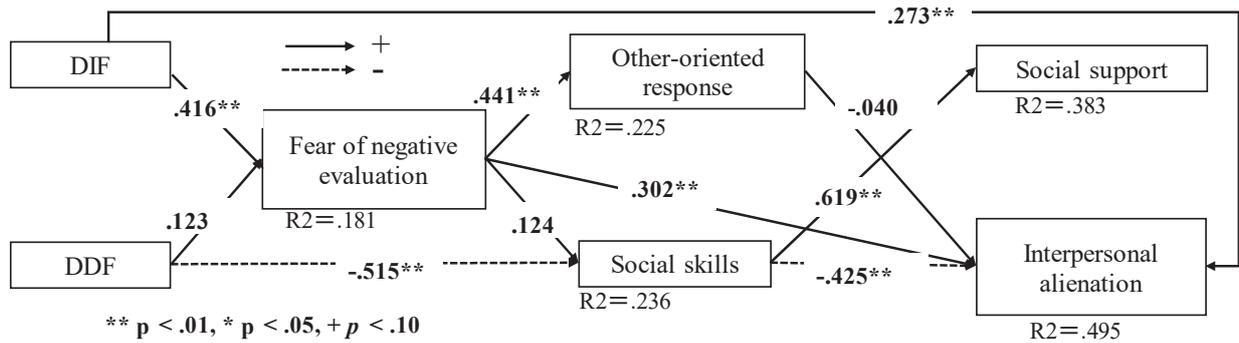


Figure 2. Effects of DIF and DDF on interpersonal relationships.

Note: Error term and covariance omitted.

認められず、先行研究とは一致しない結果となった。

### 仮説モデルの検討

仮説モデルに対応している部分にパスを仮定し構造方程式モデリングによるパス解析を行った。モデルを採用するかどうかは、適合度指標であるCFIが.90以上、RMSEAとSRMRが.10以下を目安とするとともに、 $\chi^2$ 検定を用いた。しかしながら、仮説モデルはこれらの基準を満たさなかった ( $\chi^2(12) = 110.984$ , CFI = .672, RMSEA = .241, SRMR = .171, AIC = 3171.258)。共分散構造モデルの分析では、当初に想定していた仮説モデルの変更を全く行わずデータに適合することは稀であり、そして、有意ではないパスの追加や削除によってモデル修正を試みる場合には、理論的に説明可能な範囲にとどめる必要がある (e.g., 狩野・三浦, 2007; 島津・越川, 2014)。これをふまえ、修正指標が15以上のパラメータを基準とし、理論的整合性も考慮したうえでパスを追加する箇所を決定した。

修正指標が15以上となったのは、感情言語化困難から対人スキル、感情認識困難から対人疎外感、評価懸念から対人疎外感へのパスであった。感情言語化困難が高いほどスキル乏しくなること (Liss, Mailloux, & Erchull, 2008)、評価懸念傾向が高いと対人疎外感が高くなること (Tran, Wright, & Mindel, 2008)、感情認識困難が疎外感を高め、友好的な関係形成への抵抗を高める (Quinton & Wagner, 2005) ことが報告されている点をふまえ、当該箇所にパスを追加した修正モデルについて追加検討を行うことにした。

分析を行った結果、 $\chi^2$ 検定の結果を除いてモデル適合の基準を満たしたことから、修正モデルは許容水準にあると判断した ( $\chi^2(9) = 5.265$ ,  $p < .001$ , CFI = 1.000, RMSEA = .000, SRMR = .030, AIC = 3073.539; Figure 2)<sup>3)</sup>。修正モデルが基準を満たしたため、有意差検定の繰り返しによる第1種の過誤を防ぐことを目的として、ステップダウン・ボンフェローニの調整を行った (豊田, 2003)。その結果、感情言語化困難から評価懸念、評価懸念から対人スキル、他者志向的反応から対人疎外感へのパス係数は有意にならなかったが、その他のパス係数は有意であることが確認された<sup>4)</sup>。

モデル内の標準化パス係数について、まず、感情認識困難に着目した場合、感情認識困難が高いほど評価懸念が高く、評価懸念が高いほど他者志向的反応と対人疎外感が高いことが示された。次に、感情言語化困難に着目した場合、感情言語化困難が高いほど対人スキルが低く、対人スキルが低いほどソーシャルサポートの低さや対人疎外感の高さにつながっていた。これを踏まえ、ブートストラップ法 (5,000 サンプル) を用いた間接効果の検討を行った。

感情認識困難を説明変数、評価懸念を媒介変数、他者志向的反応を目的変数として分析を行ったところ間接効果は有意であった (indirect effect = .157,

3) 図中では誤差項は省略した。また各数値は標準化パス係数 ( $\beta$ ) を指す。

4) 有意にならなかったパスを削除したうえで分析した結果、モデル適合度は満たされた ( $\chi^2(11) = 9.482$ , CFI = 1.000, RMSEA = .000, SRMR = .046, AIC = 3071.755)。しかし、ある程度の適合度が得られている場合、有意でないパスをモデルから必ずしも削除する必要はないという豊田 (2003) の指摘に基づき、このモデルは採択しなかった。

95%CI [.041-.302])。この際、目的変数を対人疎外感に置き換えた場合も間接効果は有意であった (indirect effect =.100, 95%CI [.025 - .226])。さらに感情言語化困難を説明変数、対人スキルを媒介変数、ソーシャルサポートを目的変数とした場合 (indirect effect =-.318, 95%CI [-.471 - .178]), 対人疎外感を目的変数とした場合 (indirect effect =.219, 95%CI [.101 - .353]) のいずれにおいても間接効果は有意であった。なお、感情認識困難と対人疎外感との間には直接効果が認められた。

以上のように間接効果が認められた一方で、有意ではないパスを媒介した場合、間接効果は認められなかった。感情認識困難に関しては、感情認識困難を説明変数、評価懸念と対人スキルを媒介変数、対人疎外感を目的変数とした場合 (indirect effect = -.018, 95%CI [-.061-.007])、そして、目的変数をソーシャルサポートに置き換えた場合 (indirect effect =.025, 95%CI [-.011-.085]) には間接効果が見られなかった。さらに、評価懸念と他者志向的反応を媒介変数、対人疎外感を目的変数とした場合も間接効果は認められなかった (indirect effect =-.006, 95%CI [.053-.025])。感情言語化困難についても同様であった。感情言語化困難を説明変数、評価懸念と対人スキルを媒介変数、対人疎外感を目的変数とした場合 (indirect effect =-.006, 95%CI [-.040-.006])、そして、目的変数をソーシャルサポートに置き換えた場合 (indirect effect =.009, 95%CI [-.009-.050]) は間接効果が見られなかった。さらに、評価懸念と他者志向的反応を媒介変数、対人疎外感を目的変数とした場合も間接効果は有意とならなかった (indirect effect =-.002, 95%CI [-.038-.010])。

以上より、アレキシサイミアの下位尺度である感情認識困難は評価懸念を介して他者志向的反応と対人疎外感につながるという媒介過程と、感情言語化困難が対人スキルを介してソーシャルサポートと対人疎外感につながる媒介過程が示唆された。

#### IV. 考察

本研究では、感情認識困難と感情言語化困難がソーシャルサポートと対人疎外感に及ぼす影響につ

いて、評価懸念、他者志向的反応、対人スキルの観点から検討を行った。以下では、評価懸念と対人スキルにおいて間接効果が認められた点について考察した後、感情認識困難と対人疎外感との間に直接効果が認められた点について考察する。

まず、モデル内の標準化パス係数に着目した場合、感情認識困難が高いほど評価懸念が高く、評価懸念が高いほど他者志向的反応と対人疎外感が高くなることが示された。感情認識困難が評価懸念を介して他者志向的行動につながるという結果は、感情認識困難と評価懸念の関連について述べた Turk et al. (2005) や Abe et al. (2020) の知見、そして、評価懸念と他者志向的反応の関連について報告した Tibi-Elhanany, & Shamay-Tsoory (2011) の知見と一致するものであった。しかし、Davis (1983) によって報告された他者志向的な反応と対人的疎外感の関連は見られなかった。対人疎外感には評価懸念が直接影響を与えており、この点に関して Tran et al. (2008) は、評価懸念が高いほど対人疎外感が高いことを指摘している。評価懸念が高い場合、他者から否定的な評価を避けたいという動機から周囲の人間と親密な関係を築こうとせず、結果的に対人疎外感が高まると考えられる。この結果は、感情認識困難が対人疎外感の高さに至るプロセスのなかで、評価懸念がそれらをつなぐ役割を担うことを示唆している。

次に、感情言語化困難に関しては、感情言語化困難の傾向が高いほど対人スキルが低く、対人スキルが低いほどソーシャルサポートの低さと対人疎外感の高さにつながることを示された。対人スキルの低さがソーシャルサポートの低さにつながる点に関しては Cohen et al. (1986) や Gambrill (1995) の知見と一致しており、対人疎外感の高さにつながる点に関しては Cals et al. (2013) の知見と整合的である。しかし、感情言語化困難は評価懸念を介さずに対人スキルにつながっていた。Lumley, Oviess, Stettner, Wehmer & Lakey (1996) は、アレキシサイミア傾向が高い個人は対人スキルが低いことを指摘しており、本研究の結果においても感情言語化困難と対人スキルの関連が示されたことから、アレキシサイミアのなかでもとりわけ感情を言語化できないことが

対人スキルの低さにつながると考えられる。先行研究では、対人スキルの低さがソーシャルサポートの低さ (Cohen et al., 1986) と対人疎外感の高さ (Cals et al., 2013) につながると報告されているが、対人スキルはこれらの変数と関連するだけでなく、感情言語化困難がソーシャルサポートと対人疎外感に至るプロセスのなかで、それらをつなぐ役割を担っていることが示唆された。

これまでの知見では、アレキシサイミアの各特徴が対人疎外感を高めるプロセスに関して、評価懸念と対人スキルを介して対人疎外感の高さにつながる可能性 (Abe et al., 2020; Cals et al., 2013; Halford & Foddy, 1982) と、評価懸念と他者志向的反応を介して対人疎外感が低減される可能性 (Davis, 1983; Tibi-Elhanany, & Shamay-Tsoory, 2011) の両方が想定されうる状況であり、一貫した傾向が認められていなかった。本研究の結果から、感情認識困難は評価懸念を介して対人疎外感につながり、感情言語化困難は対人スキルの低さを介して対人疎外感につながる可能性が示唆された。さらに、感情言語化困難は対人スキルの低さを介してソーシャルサポートの低さにもつながる可能性が示唆された。

モデル内の直接パスに着目した場合、感情認識困難と対人疎外感には正の直接の関連が見られた。この結果は、感情認識困難と対人疎外感の間に直接的な関連があることを示しているものの、他の可能性として評価懸念以外の変数が感情認識困難と対人疎外感の関係を媒介している可能性も想定できる。たとえば、先行研究ではアレキシサイミア傾向が高くなるほど肯定的な感情を体験することが困難で (Taylor, Bagby, & Parker, 1997)、対人関係のなかで自らの感情を把握し他者と共有できない場合、疎外感が高まる可能性が示唆されている (McCaslin, et al., 2006)。本研究では、この傾向が対人疎外感の高さとして表れたのだと考えられる。

我々の日常生活において、良好な対人関係を保つことは精神的健康を左右する重要な要因のひとつである。良好な対人関係を促進するためには、自身の気持ちを把握し (平木, 2012)、適切に感情を表出することが重要 (Wolpe, 1958) である。前者が感情認識困難の、後者が感情言語化困難の傾向が高い人々

が抱える問題に該当することを踏まえれば、感情認識困難と感情言語化困難それぞれの特徴に見合った支援や介入が必要である (Kellner, Chew, & Turner, 2018)。本研究の結果はこの問題を解決するうえでの一助となると考えられる。具体的には、評価懸念の低減を目的とした、あるいは対人スキルのトレーニングを目的とした介入や心理教育が有効である可能性があげられる。評価懸念を低減するような介入をすることで感情認識困難の傾向が対人疎外感に至ることを抑止し、さらに、ソーシャルスキル・トレーニングなど対人スキルを身につける経験を積むことで感情言語化困難の傾向が対人疎外感の上昇やソーシャルサポートの低下につながることを防げる可能性がある。柴橋 (2004) は自身の意見や感情を言語化し表明しない背景には、自分のスキルに対する自信のなさがあると指摘していることから、対人関係のなかで自分の意見を主張するスキルに不安を感じないようにするためのアプローチが必要であると考えられる。また、感情認識困難と感情言語化困難の両方の特徴を有する場合においては、評価懸念の低減と対人スキルの向上をはかるアプローチどちらも取り入れる、あるいは、個人が持つ傾向によって柔軟に介入の割合を検討する必要があるだろう。そのほか、感情認識困難から対人疎外感への直接パスが有意であったことから、診断横断アプローチや弁証的行動療法などで行われる感情調整のためのスキルトレーニングを行うなど、感情認識困難や感情言語化困難に直説的に働きかけることが有用である可能性がある。行動、感情、認知 (思考パターン) を変化させるような方略を身につけることで、対人関係上の不適応や不安定な感情への対処が可能になると考えられる。

一方で、モデルの分散説明率を考慮すると介入の効果に関しては慎重を期すべきである。他者志向的反応と対人疎外感それぞれの分散説明率に着目すると、他者志向的反応よりも対人疎外感への説明率の方が高かった。この結果は評価懸念が変化した場合の影響が他者志向的反応よりも対人疎外感に表れやすいことを示唆している。つまり、評価懸念を低減することで他者志向的反応は弱まりにくい、対人疎外感低減する可能性があるということである。

最後に、本研究の限界点として以下の4点があげられる。ひとつは、本研究で収集したデータの問題である。本研究では一時点で観測されたデータの変数間について分析を行っているため、モデル内の変数における因果関係に関しては慎重に解釈する必要がある。因果の方向性について一歩踏み込んだ検討をするためには、今後、縦断調査を行い因果関係についてより明確なモデルを確認する必要があるだろう。もうひとつは、調査対象者を大学生に限定した問題である。本研究のモデルが大学生以外の年齢層にある人々、たとえば、思春期や成人以降の人々においても支持されるか否かについて追加の検討を行う必要があると考えられる。さらに、本研究で扱った変数は調査対象となる大学によって差がみられる可能性がある。すなわち、データに階層性が存在する可能性がある。これは、大学間で学生支援の方針、雰囲気、授業方法、教員と学生間の接点の多寡などが異なることが想定されるためである。今後は大学間の等質性や異質性を考慮して複数の大学間で調査を行う必要があるだろう。最後に、本研究は質問紙法による調査であるため、対人スキルやソーシャルサポートをはじめとした得点が外的事実なのか、本人の主観的な判断によるものなのかが厳密には判別しがたい点である。そのため、周囲の他者が本人を見たときの判断、つまり、第三者による測定に代えるといった別のアプローチで検討する必要があると考えられる。今後はこれらの検討を通して知見を積み重ね、介入アプローチの方策を精緻化していくことが期待される。

## 引用文献

Abe, N., Abe, K., & Nakashima, K. (2020). The role of perceived stress and fear of negative evaluation in the process from alexithymia to over-adaptation. *Psychologia*, *62*, 217-232.

Bagby, R. M., Parker, J.D.A., & Taylor, G. J. (1994). The twenty-item Toronto Alexithymia Scale-I. Item selection and cross-validation of the factor structure. *Journal of Psychosomatic Research*, *38*, 23-32.

Barrera, M. (1986). Distinctions between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, *14*, 413-445.

Cals, J. W., de Bock, L., Beckers, P. J. H., Francis, N. A., Hopstaken, R. M., Hood, K., de Bont, E. G. P. M., Butler, C. C., & Dinant, G. J. (2013). Enhanced communication skills and C-reactive protein point-of-care testing for respiratory tract infection: 3.5 year follow up of a cluster randomized trial. *Annals of Family Medicine*, *11*, 157-164.

Caplan, G. (1974). Support systems and community mental health: Lectures on concept development. New York: Behavioral Publications.

Cobb, S. (1976). Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, *38*, 300-314.

Cohen, S., Sherrod, D. R., & Clark, M. S. (1986). Social skill and the stress-protective role of social support. *Journal of Personality and Social Psychology*, *50*, 963-973.

Davis, M. H. (1983). Meaning individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, *44*, 113-126.

Dean, D. G., & Lewis, A. K. (1978). Alienation and emotional maturity: A preliminary investigation. *Psychological Reports*, *42*, 1006.

遠藤 寛子・湯川 進太郎 (2013). 怒りの維持過程における思考の未統合感に影響を及ぼす諸要因の検討 心理学研究, *84*, 458-467.

藤野 京子 (2014). 否定的に評価された場面における怒り表出に至るプロセスの解明について——自尊心や不安の影響を加味した分析—— 犯罪心理学研究, *52*, 47-58.

Gambrill, E. (1995). Helping shy, socially anxious, and lonely adults: A skill-based contextual approach. In W. O'Donohue & L. Krasner (Eds.), *Handbook of psychological skills training: Clinical techniques and applications* (pp. 247-286). US: Allyn & Bacon

Halford, K., & Foddy, M. (1982). Cognitive and social skills correlates of social anxiety. *British Journal of Clinical Psychology*, *21*, 17-28.

平木 典子 (2012). アサーション入門——自分も相手も大切に自己表現法 講談社

Hua J., Le Scanff C., Larue J., José F., Martin JC., Devillers L., & Filaire E. (2014). Global stress response during a social stress test: Impact of alexithymia and its subfactors. *Psychoneuroendocrinology*, *50*, 53-61.

岩佐 一・権藤 恭之・増井 幸恵・稲垣 宏樹・河合 千恵子・大塚 理加・小川 まどか・高山 緑・蘭牟田 洋美・鈴木 隆雄 (2007). 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性——中高年者を対象とした検討 厚生指針, *54* (6), 26-33.

狩野 裕・三浦 麻子 (2007). AMOS, EQS, CALIS によるグラフィカル多変量解析 (増補版) ——目でみる共分

## 散構造分析——現代数学社

- Kellner, F., Chew, E., & Turner, J. (2018). Understanding the Relationship of Alexithymia and Leadership Effectiveness through Emotional Intelligence: An Integrative Literature Review. *Peformance improvement quarterly*, 31, 35-56.
- Kinnaird, E., Stewart, C., & Tchanturia, K. (2019). Investigating alexithymia in autism: A systematic review and meta-analysis. *European Psychiatry*, 55, 80-89.
- 小牧 元・前田 基成・有村 達之・中田 光紀・篠田 晴男・緒方 一子・志村 翠・川村 則行・久保 千春 (2003). 日本語版 The Twenty-Item Toronto Alexithymia Scale (TAS-20) の信頼性, 妥当性の検討 心身医学, 43, 839-846.
- Koster, E. H. W., Hoorelbeke, K., Onraedt, T., Owens, M., & Derakshan, N. (2017). Cognitive control interventions for depression: A systematic review of findings from training studies. *Clinical Psychology Review*, 53, 79-92.
- Liss, M., Mailloux, J., & Erchull, M. J. (2008). The relationships between sensory processing sensitivity, alexithymia, autism, depression and anxiety. *Personality and Individual Differences*, 45, 255-259.
- Lumley, A. M., Ovies, T., Stettner, L., Wehmer, F., & Lakey, B. (1996). Alexithymia, social support and health problems. *Journal of Psychosomatic Research*, 41, 519-530.
- McCaslin S. E, Metzler T. J, Best S. R, Liberman A, Weiss D. S, Fagan J, & Marmar C. R. (2006). Alexithymia and PTSD symptoms in urban police officers: Cross-sectional and prospective findings. *Journal of Traumatic Stress*, 19, 361-373.
- 箕口 雅博・千田 茂博・久田 満 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (2) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 145-146.
- 宮下 一博・小林 利宜 (1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究, 29, 297-305.
- 宮下 一博 (1995). 疎外感の要因に関する研究——家庭環境及び自己概念に焦点を当てて—— 千葉大学教育学部研究紀要, 42, 71-83.
- Moriguchi, Y., Maeda, M., Igarashi, T., Ishikawa, T., Shouji, M., Kubo, C., & Komaki, G. (2007). Age and gender effect on alexithymia in large, Japanese community and clinical samples: A cross-validation study of the Toronto Alexithymia Scale. *Biopsychosocial Medicine*, 7, 1751-1759.
- 盛田 真理子 (2010). 女子青年における強迫性, アレキシサイミア, 抑うつと神経性食欲不振傾向の関連 心身医学, 50, 857-862.
- 中島 園美 (2013). 喘息患者の自己管理不良に影響を及ぼす情動認知: アレキシサイミアと共感性からの検討 カウンセリング研究, 46, 73-82.
- Nicolò, G., Semerari, A., Lysaker, P.H., Dimaggio, G., Conti, L., D'Angerio, S., Procacci, M., Popolo, R., & Carcione, A. (2011). Alexithymia in personality disorders: Correlations with symptoms and interpersonal functioning. *Psychiatry Research*, 190, 37-42.
- Popkirov, S., Flasbeck, V., Schlegel, U., Juckel, G., & Brüne, M. (2018). Alexithymia in borderline personality disorder is not associated with deficits in automatic visual processing of negative emotional stimuli. *Psychiatry Research*, 263, 121-124.
- Posse, M., Hällström, T., & Backenroth-Ohsako, G. (2002). Alexithymia, social support, psycho-social stress and mental health in a female population. *Nordic Journal of Psychiatry*, 56, 329-334.
- Quinton, S., & Wagner, H. L. (2005). Alexithymia, ambivalence over emotional expression, and eating attitudes. *Personality and Individual Differences*, 38, 1163-1173.
- 笹川 智子・金井 嘉宏・村中 泰子・鈴木 真一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版の試み——項目反応理論による検討 行動療法研究, 30, 87-98.
- 柴橋 祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 島本 好平・石井 源信 (2006). 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, 211-221.
- 島津 直実・越川 房子 (2014). 反応スタイルと抑うつに関する因果モデルの検討 心理学研究, 85, 392-397.
- Sifneos, P. E. (1973). The prevalence of alexithymic characteristics in psychosomatic patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 22, 255-262.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人疎外感との関係 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度の作成——自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—— 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 田中 奈津美・長谷川 晃 (2019). 大学生の両親に対する行動と両親からのソーシャル・サポート, 家族機能, 抑うつとの関連 感情心理学研究, 26, 36-46.
- Taylor, G.J., Parker, J.D.A., Bagby, R. M., & Acklin, M. W. (1992). Alexithymia and somatic complaints in psychiatric outpatients. *Journal of Psychosomatic Research*, 36, 1-8.
- Taylor, G., Bagby, R., & Parker J. (1997). Disorders of

- affect regulation. Cambridge University Press, Cambridge.
- Tibi-Elhanany, & Shamay-Tsoory. (2011). Social cognition in social anxiety: First evidence for increased empathic abilities. *Israel Journal of Psychiatry and Related Science*, 48, 98-106.
- 豊田 秀樹 (2003). 『共分散構造分析 [疑問編]』朝倉書店
- Turk, C. L., Heimberg, R. G., Luterek, J. A., Mennin, D. S., & Fresco, D. M. (2005). Emotion Dysregulation in Generalized Anxiety Disorder: A Comparison with Social Anxiety Disorder. *Cognitive Therapy and Research*, 29, 89-106.
- Tran, T. V., Wright, R. & Mindel, C. H. (2008). Alienation Among Vietnamese Refugees in the United States. *Journal of Social Service Research*, 11, 59-75.
- Wolpe, J. (1958). Psychotherapy by reciprocal inhibition. *Pavlovian journal of research & therapy*, 3, 234-240.
- (2022. 4. 1 受稿) (2022. 8. 31 受理)  
(ホームページ掲載 2022年9月)